

## <研究主題>

### 中堅教員と若手教員によるブロックでの協働的授業づくり

相馬市立日立木小学校 教諭：高橋尚幸・奥山涼

#### 1 主題設定の理由

##### 高橋の視点

高橋は39歳、教員17年目のいわゆる中堅教員であるが、前任校でも現任校でも、年齢としては「下から2番目」。ベテラン教員から守ってもらいながら仕事をしている、とも言える。しかし、今後のキャリア形成を考えた時、**「後輩を育てる」という仕事に積極的に取り組まなくてはいけない**だろう。

##### 奥山の視点

奥山は25歳、教員4年目のいわゆる若手教員である。採用3年目で体育主任となり、さらには相馬新地地区体育大会の事務局も務めた。**授業についてもっと学びたいという意欲はあるものの、膨大な校務に追われ、授業準備が後回しになっているという自覚**がある。指導書に頼って授業を行ってきた。

##### その他の問題点

- 1 福島県全体が、ベテラン層が極端に多く、中堅・若手層が極めて少ない年齢構成になっている。
- 2 単学級の小規模校では、ワークシートや宿題の共有といった指導面での交流が難しい。
- 3 行事や研究授業での協働が多く、日常的に教員が教え、学ぶ場が確保できていない。



「中堅教員が授業づくりについて伝え、若手教員が学ぶ場」を**日常的・継続的に確保する**ことが重要であると考え、本研究主題を設定した。

### 3 研究の視点

#### < 研究仮説 >

日常的に、無理なく授業づくりに取り組むために、①単元計画表の作成 ②2学年合同授業 ③テストの得点分布グラフ作成と分析 の3つの手立てで協働的な授業づくりを行うことが出来れば、中堅・若手教員双方の力量形成が図られるであろう。

#### (1) 手立て1 教材研究：単元計画表の作成

**教材研究として「単元計画表」を作成する**ことにした。ここで言う単元計画表とは、「単元のねらい」「単元の時数」「各時間のねらい」「評価方法」を記載した「簡易的なシラバス」である。これは作成後、児童に配付している。

単元全体を見通した計画表を作成することで、若手教員がねらいを明確にして授業に取り組めるようにしたいと考えた。また、中堅教員が「惰性」で、今まで通りの授業を続けてしまうことなく、常に新しい授業を考えられるようにしたいと考えた。

#### (2) 手立て2 授業実践：2学年合同授業

**5・6年生合同で『学び合い』の授業に取り組む**こととした。『学び合い』とは、上越教育大学教職大学院の西川純教授が提唱している授業理論である。『学び合い』の授業は、「児童が自ら主体的に学ぶ」授業であり、「学び方を学ぶ」授業である。そのため、5年生と6年生で学習内容が異なっても、学び方の指導という側面から、同時に指導が可能であると考えた。

#### (3) 手立て3 振り返り：テストの得点分布グラフ作成と分析

**単元の振り返りとして、単元テストの得点分布をグラフ化し、分析を行う**こととした。多くの場合、点数をパソコンの集計ソフトに入力して終わってしまうか、平均点を出してそれが「期待得点よりも高い・低い」を見て終わってしまう場合がほとんどであろう。しかし、平均点だけでは、児童の実態は分析しきれない。というのは、平均点は一定の数の児童が上がれば上昇するからだ。学級全体の様子を把握するために、分布の変化を見ることで、次の授業改善へと繋げていきたいと考えた。

また、教員の「授業力」を数値化して計ることは難しいと考えたが、この単元テストの分布分析を通して、授業づくりの成果を計っていきたいと考えた。

これら三つの手立てを通して、「ブロックによる授業づくり」の実践を行うとともに、その効果と問題点を探ることが、本研究の目的である。



## (2) 手立て2「2学年合同授業」について

二つの学年が合同で行う授業として、『学び合い』に取り組んだ。

### ① 『学び合い』の授業

『学び合い』（二重括弧学び合い）とは、上越教育大学教職大学院の西川純教授が提唱した学習理論であり、「学習を可能な限り児童に任せる」ことが大きな特徴である。「任せる」のは、学習の大部分である。グループの決定に始まり、学習する場所や問題の解き方についても、児童が任意で選んだり自分で考えたりすることを奨励する。ただし、学習課題は教員がはっきりと明示し、その評価もしっかりと行うことが重要とされている。

しかし、授業中に教員は何もしていないわけではない。時には教員の支援が必要となる。『学び合い』に限らず、授業では教員がどこでどのような支援を行うかという判断は、非常に難しい。タイミングや支援方法などを授業者2名で観察したり、相談したりしながら決めていった。

5・6年生が合同で『学び合い』を行うと、面白い現象が起きた。5年生が6年生に教わることは当然あるが、逆に、6年生が5年生に質問をすることが少なくないのである。6年生に話を聞くと、「6年生の勉強で、5年生の内容を使うこともあるから。」という答えであった。

### ② 「質問づくり」の授業

『学び合い』の発展授業として、「質問づくり」の授業に取り組んだ。これは、「たった一つを変えるだけ」(ダン・ロステイン、ルース・サンタナ 著、吉田新一郎 訳)で紹介されている学習方法である。

5年生は「大造じいさんとがん」、6年生は「やまなし」で質問づくりに取り組んだ。同じ学年同士で話し合うだけでなく、5年生と6年生が一緒になって相談する姿も見られた。

その後、自分たちで作った「質問」の答えを探すために、「心情曲線の作成」を行った。これも『学び合い』の授業で行い、教員が授業を進めるのではなく、児童が互いに相談し合いながら、学習を進めていった。

児童は、友達と「どうしてここで線が上がるの?」「ここはそんなに心情の変化はないと思うんだけどなあ。」などと学び合いながら、読み取っていった。また、互いのノートを読み合うことで、自分が気づかなかった叙述について付け足す姿も多く見られた。読み取ったことは、感想文としてまとめた。5年生・6年生共に、自分の読みと友達の読みを比較して書けており、単元のねらいが達成できたと言えるだろう。

## ○授業実践：中堅・高橋の視点から

私自身は、『学び合い』による授業を8年前から実践しているが、「慣れ」というのは、良い面もあるが、悪い面もある。奥山先生から『学び合い』についての質問を受けることで、それまでは無意識になんとなくやっていたことを、しっかりと意識し、ていねいに授業を行えるようになった。

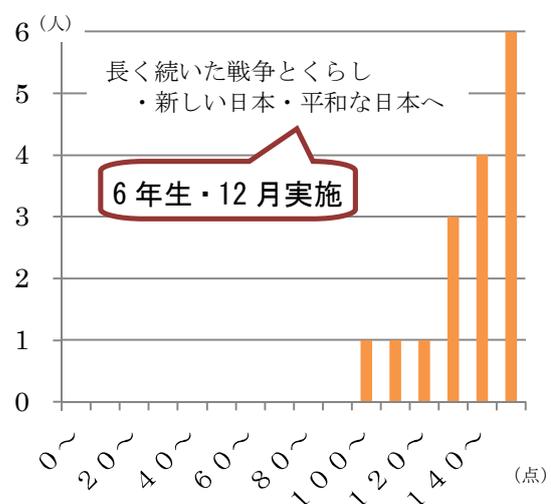
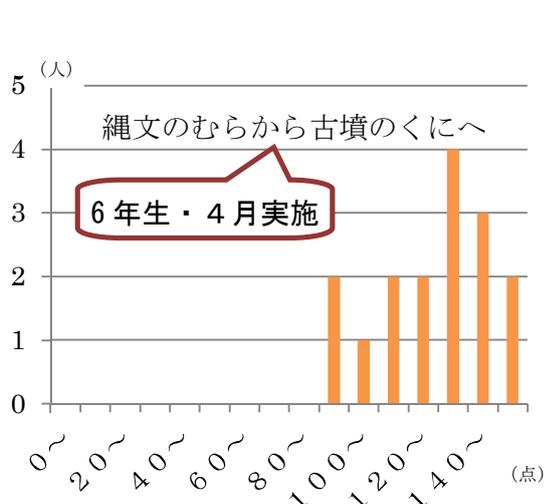
### (3) 手立て3「テストの得点分布グラフ作成と分析」について

単元テストのあとには、点数の分布をグラフ化し、分析を行った。グラフ化するの  
は、平均点だけでは分からない改善点を探すためである。

5年生は、当初、分布が「ふたこぶ」であったり、範囲が広がったりしていることから、学習が苦手な児童にとって理解しにくい授業となっている可能性が高いと判断した。そこで、「苦手な子をどう伸ばすか」を考えて、教材研究を行うこととした。

その結果、全体の傾向として、最低点数が上昇し、分布の幅は小さくなった。ただ、残念ながら「ふたこぶ」の傾向は完全には解消できなかった。

一方、6年生は、当初、満点が少なく、得点率8割～9割の児童が多い分布となった。ここからは、6年生ではもっと伸びる児童の力を伸ばしきれていないのではないかと判断した。そこで、「得意な子をどう伸ばすか」を考えて、教材研究を行うこととした。具体的には、調べる内容や考える内容を増やし、課題の難易度を上げた。この成果は、社会科の学習で顕著であった。課題の難易度をあげることで、社会科が得意な子や好きな子が一生懸命に学習し、それに引っ張られるようにして、学級全体が楽しみながら詳しく学習するようになった。



## 5 成果と課題

### (1) 教材研究に関して

- 協働で教材研究を行う上で、単元計画表を作成することは、非常に有効な手立てであると分かった。
- 単元の計画表づくりを通し、若手教員が教材研究のポイントを学ぶことができた。また、中堅教員の「マンネリ防止」にも高い効果があることが実感できた。

### (2) 合同授業に関して

- 異なる学年が一緒に授業を行うためには、合同の『学び合い』や「質問づくり」といった「学習者主体の授業」が有効であると分かった。また、若手教員と中堅教員が、何度も一緒に授業をする中で、細かい指導技術や支援方法について相談することもできた。
- 若手教員だけでは難しい授業を実践できた。中堅教員にとっては、「教えるために学ぶ」ことが多かった。

### (3) 振り返りに関して

- 点数分布をグラフ化し見比べることは、それぞれの学級の課題を浮き彫りにするという点で有効であると分かった。
- 分布を見ることで、一人一人に目を向けることができた。
- 前の単元が終わってすぐに次の単元を始める、という流れの中では「反省点を生かし、授業改善を図る」というサイクルを有効に回すことが難しかった。

### (4) 全体を通して

- 学級経営についても相談し、話し合う機会が生まれた。
- 宿泊活動のような2学年合同の行事の運営もスムーズに行うことができた。
- 5・6年生がどちらも落ち着いた状態で生活できた。
- 児童に直接関わるものを中心に据えた今回の取り組みは、無理なく授業づくりを進めるためには、極めて有効であると分かった。
- 成果は多い一方、「テスト結果」という面では、向上の余地がある。5年生・6年生ともに、低い結果ではないが、満足のいく結果でもなかった。これは、5年生では点数の二局化、6年生では苦手意識の克服という課題が完全には克服できなかつたことが大きい。
- 今後はブロックを超え、学校全体での授業づくりについても研究していきたい。